

『百科全書』の無記名項目とサン＝ランベールの経済思想

——『四季』『冬』の注記を出発点として——

井 上 櫻 子

本文17巻図版11巻からなるフランス18世紀の知の金字塔『百科全書 *L'Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*』(1751-1772年)はいかにして誕生したのか。1960年代にまとめられたJ. プルーストおよびJ. ラフの古典的研究⁽¹⁾に始まり、現在も刻々と進化を遂げている『百科全書』電子批評版サイト⁽²⁾に至るまで、『百科全書』研究を支えてきたのは20年以上の年月を費やして完成された大事典の知的工房の諸相を解き明かそうという野心である。当初は高等法院による断罪や教皇による禁書処分、ダランベールとの確執といった困難な状況を乗り越えて刊行計画を成し遂げたディドロに注目が集められる傾向にあったが、近年では編集者としてのディドロの傑出した才能を認めながら、同時に『百科全書』が複数の寄稿者たちの共同作業によって実現したものであることが再確認されつつある。その背景にある理由としては、F. カフカによってそれまで光の当てられることのなかった百科全書の寄稿者たちに関する調査結果がまとめられたことや⁽³⁾、ダランベールやジョクールについての研究が深められ、彼らの編集者としての再評価が進んでいることが挙げられるだろう⁽⁴⁾。

ところで、今日の『百科全書』研究における大きな課題の一つに、無記名項目の解明という問

(1) Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, A. Colin, 1962 ; John Lough, *Essays on the Encyclopédie of Diderot and d'Alembert*, Oxford University Press, 1968 ; *id.*, *The Encyclopédie*, Longman, 1971.

(2) フランス科学アカデミーが運営する本サイトには、フランス学士院図書館所蔵の『百科全書』初版画像がアップロードされており、現在、『百科全書』電子批評版プロジェクトチームによって掲載項目に注釈をほとこす作業が進められている。<https://enccre.academie-sciences.fr/encyclopedia/>

(3) Frank A. Kafker, *The encyclopedists as a group : a collective biography of the authors of the Encyclopédie. Studies on Voltaire and the eighteenth Century*, Voltaire Foundation, 1996.

(4) ダランベールの著作については、2002年からフランス国立科学研究センターが全集刊行企画を進めている(<http://dalembert.academie-sciences.fr>)。また、百科全書派の書き手としてのジョクールの功績は、G. バルーとF. ペパンによる編著 (Gilles Barroux et François Pépin (dir.), *Le Chevalier de Jaucourt. L'homme aux 17 000 articles*, Société Diderot, 2015) にまとめられている。

特に編集者としてのダランベールとジョクールの貢献については、以下を参照のこと。Irène Passeron, « D'Alembert, le savant philosophe », *Les acteurs*, chap. II. Les éditeurs, Édition Numérique Collaborative et Critique de l'*Encyclopédie*, <https://enccre.academie-sciences.fr/documentation/> ; Marie Leca-Tsiomis, François Pépin et Alain Cernuschi, avec les compléments biographiques de François Launay, « Jaucourt, l'encyclopédiste par excellence », *Les acteurs*, chap. II. Les éditeurs, Édition Numérique Collaborative et Critique de l'*Encyclopédie*, <https://enccre.academie-sciences.fr/documentation/>.

題がある。この問題は、特にディドロの執筆項目を再同定する必要性和関連して浮上したものである⁽⁵⁾。というのも、『百科全書』第9巻以降、それまでの巻ではディドロの執筆項目の印として項目冒頭に掲げられていたアステリスクが消えてしまうからである。こうした無記名項目からディドロの手に成る項目を割り出す試みについては、この問題に厳密な姿勢で臨もうとしたJ.ブルースト以来、ディドロの専門家の間でも見解が分かれてきたところであるが⁽⁶⁾、適切な基準を設けた上で執筆者同定を試みることは『百科全書』研究の新たな道筋を開くものとして次第に積極的な価値が付与されつつある。この大事典の項目執筆者でありながら、記名しなかったのはディドロだけではない。というよりもむしろ、『百科全書』には王権や教権に批判的な記述が含まれるため、制作に協力しつつも、その名を明かすことには慎重な態度を示した執筆者は決して少なくなかったのである⁽⁷⁾。本論考での考察の対象となるジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベール（Jean-François de Saint-Lambert, 1716-1803）もそのような寄稿者の一人である。フランス国王軍に属し、短期間とはいえ七年戦争にも参加した軍人貴族であったからだろうか⁽⁸⁾。サン＝ランベールの従軍期間にあたる1757年に刊行された『百科全書』第7巻巻頭では、彼は項目執筆者だと知られるのを望まなかった5人の人物の一人として記録されている⁽⁹⁾。しかし1769年に発表した詩集『四季 *Les Saisons*』⁽¹⁰⁾では、サン＝ランベールはとところどころで自ら『百科全書』に寄稿した項目との連続性をほめかしているのである⁽¹¹⁾。本論考では、『四季』の記述にもとづきながら詩人が執筆したと推測される『百科全書』の無記名項目の同定を試みつつ、

(5) Marie Leca-Tsiomis, « L'Encyclopédie et Diderot : vers de nouvelles attributions d'articles », *Recherche sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 55, 2020, pp. 119-133.

(6) この問題については以下の論考に簡潔にまとめられている。井田尚「無署名項目の書き手の特定は可能か? 『百科全書』におけるディドロの項目の認定基準とその余白」『青山フランス文学論集』第30号、2021年、pp. 5-32（特に pp. 13-17を参照のこと）。

(7) 井田、前掲論文、pp. 9-13。

(8) サン＝ランベールの生涯とその作品については、基本的にR.ポワリエの著作を参照しているが（Roger Poirier, *Jean-François de Saint-Lambert (1716-1803). Sa vie, son œuvre*, Pierron, 2001）、サン＝ランベールがフランス軍に参加した時期とその役割についてはP.ブテイエの記述をもとにしている（Paul Bouteiller, *Un Ami du Prince de Beauvau. Le poète Saint-Lambert 1716-1803*, 1997, p. 7）。

(9) より正確には、サン＝ランベールの名を挙げるのではなく、項目« FANTAISIE », « FRAGILITÉ (Morale) », « FRIVOLITÉ », « GÉNIE (Littér.) »の執筆者として紹介されている。「NOMS des auteurs qui ont fourni des articles pour ce Volume », dans *l'Encyclopédie*, t. VII, 1757, p. xiv.

(10) サン＝ランベールの文学史上の功績は、詩集『四季 *Les Saisons*』（初版1769年）をもって描写詩というフランス18世紀に特有のジャンルを確立したこととされる。描写詩の発展におけるサン＝ランベールの『四季』の位置付けについては以下の著作に詳しい。Margaret Cameron, *L'Influence des Saisons de Thomson sur la poésie descriptive en France (1759-1810)*, Honoré Champion, 1927 (reproduction publiée chez Slatkine en 1975), Édouard Guitton, *Jacques Delille (1738-1813), et le poème de la nature en France de 1750 à 1820*, Klincksieck, 1974.

(11) 例えば、『四季』第2歌「夏」の注記には、サン＝ランベールが項目「作法 « MANIÈRE »」の作者であることが明記されている。Jean-François de Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème, texte établi et présenté par Sakurako Inoué*, STFM, 2014, « Notes de Saint-Lambert sur « l'Été » », p. 169.

同時にサン＝ランベールの経済思想について検討していきたい。

I. 『四季』第4歌「冬」注記に見られる『百科全書』への言及

『四季』（あるいは描写詩というジャンルそのもの）は本来、素朴な田園生活の美德を伝えるべく、季節の変遷とともに装いを変える自然の姿と野に生きる人々の喜びを謳ったものである。しかしながら、この作品の最終歌「冬」に至って、作者は万物が再生し、生氣に満ちあふれる春や夏とは異なり、すべての生き物が息をひそめる極寒の季節⁽¹²⁾においてなお、荒野に生きる喜びをどのように伝えるべきかという問題に直面する。長くて暗い冬に多くの人が憂いから逃れ、諸技芸、とりわけ観劇に気晴らしを見出そうとする一方で、詩の歌い手である「私」は学問に勤しみ、人間本性の探究に専念しようとする⁽¹³⁾。いかなる時も心の平静を保ち、賢者として振る舞う「私」を描くことには、まず田園生活の賛美を主題とした韻文詩の整合性を担保する目的があると考えられる。しかし、「冬」の歌に添えられた作者自身の注記に目を通すと、詩人が新大陸と旧大陸の「法と習俗を比較検討」⁽¹⁴⁾しつつ人間とは何か、という問いを深める背景には、『百科全書』の弁護という政治的な意図が働いていることも確認される。

人間の幸福に重要なあらゆる事物について知識が増え、そしてもはや失われることはないだろう。『百科全書』の編集者は人類に不滅の貢献をした。この辞典には出来の悪い項目が数多くあるとはいえ、それらはあの2人の偉大な人物によるものではないし、この辞典が諸技芸と学問の貯蔵庫であるのには変わりがない。人間の精神は、コンスタンティヌス帝から15世紀に至るまでそうであったように、後退することはできない。野蛮状態に立ち戻るには地球全体に大変革が起こる必要があるだろう⁽¹⁵⁾。

『百科全書』第7巻刊行時（1757年）には、サン＝ランベールは協力者であることを明かそうとはしなかった。しかし、1759年の断罪後、公的な出版許可を再取得できないまま『百科全書』本文の残りの巻（第8巻から17巻）が刊行されるに際しては、サン＝ランベールは前年に自ら執筆した項目「奢侈」をそのまま独立させて『奢侈論』として発表し、この大事典の宣伝に役買っているのである——ただし表向きには依然、名前を伏せた状態ではあるが⁽¹⁶⁾。『四季』の結

(12) *Ibid.*, « L'Hiver », p. 241, « Notes de Saint-Lambert sur « l'Hiver » », p. 272.

(13) *Ibid.*, « L'Hiver », pp. 257-258.

(14) *Ibid.*, p. 258.

(15) *Ibid.*, « Notes de Saint-Lambert sur « l'Hiver » », p. 289.

(16) 『奢侈論』冒頭に添えられた出版業者の緒言によれば、サン＝ランベールはこの論考を印刷物として発表する前に、手稿の形で流布させていたとされ、事情を知った読者であれば、『奢侈論』の作者が誰であるか分かった可能性は高いと考えられる。*Essai sur le Luxe*, 1764, « Avertissement du libraire ».

びに『百科全書』の編者を称える一節を織り込むことは、サン＝ランベールにとっては自ら属する思想的陣営を擁護するだけでなく、長年の推敲の上に世に問うこととなった自然の歌をディドロやダランベールに支持してもらうためにも必要だったのかもしれない。実際、同じく「冬」の注記には、長大なヴォルテール礼賛も認められる⁽¹⁷⁾。

しかしここで疑問が生じる。『百科全書』の編者やヴォルテールへの言及は、詩人の政治的野心のみによって説明づけてよいものだろうか。さらにまた、素朴な田園生活を称える一方で、諸技芸と学問の発展を支持するのは矛盾した態度と言えるのではないか。サン＝ランベールのこうした態度は、少なくともその同時代人であるルソーとは相容れないものだ。それでは、この百科全書派の詩人は農耕生活に対してどのような考えを抱いていたのか。ここで注目したいのが、『四季』（初版）「冬」の注記に挿入された『百科全書』に関わるもう一つの記述である。

市民はその富と熱意がいかなるものであれ、ごく限られた善しかなし得ない。全体の幸福をなすのは良き法である。王国 [= フランス王国] のすみずみに至るまで農業を活性化したのは、小麦の自由な取引と利息の軽減なのである。他の場所ですでに述べたことについては、ここでは一切繰り返さないでおこう。『百科全書』の項目「立法者 « LÉGISLATEUR »」と「金銭の利息 « INTÉRÊT D'ARGENT »」を参照されたい⁽¹⁸⁾。

『百科全書』第9巻には項目「立法者 « LÉGISLATEUR »」が確かに存在し⁽¹⁹⁾、それがサン＝ランベールの執筆したものであることは、『四季』の上掲の一節のみならず、作者の生前に刊行された『サン＝ランベール思想著作集』⁽²⁰⁾第6巻——この巻には彼が『百科全書』に寄稿したとされる13の項目が再録されている——からも確認される。一方、『百科全書』第8巻には、「Intérêt」という語に関連する17項目が収められており、文学、代数学、法学など多様な分野においてこの語が使用されていることがわかる⁽²¹⁾。その冒頭を飾るのがサン＝ランベールによる執筆項目「利益（道徳）」であり、ここではパスカルやニコル、ラ・ロシュフコーの道徳論を批判しつつ、「利益」を人間のあらゆる行動原理の源とみなしたエルヴェシウスの弁護が試みられている⁽²²⁾。一方、『四季』で言及されているような「INTÉRÊT D'ARGENT」という見出し

(17) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur « l'Hiver » », pp. 290-293.

(18) *Ibid.*, p. 294.

(19) Saint-Lambert, « LÉGISLATEUR », dans *l'Encyclopédie*, t. IX, 1765, pp. 357a-363a.

(20) *Œuvres philosophiques de Saint-Lambert*, Agasse, 1797-1801, 6 vol.

なお、サン＝ランベールの執筆項目の同定方法については、『百科全書』の項目「奢侈」の草稿に関する F. ムローの論考にまとめられている。François Moureau, « Le manuscrit de l'article *Luxe* ou l'atelier de Saint-Lambert », dans *Recherche sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 1, 1986, pp. 71-84.

(21) *Encyclopédie*, t. VII, pp. 818a-827a.

ら始まる項目は存在しない。しかし、「利息の軽減が農業の活性化につながる」という主張に注目すると、『四季』の注記でサン＝ランベールが言及しているのは、おそらく17項目の最後に置かれた「利子・利息（経済学）« INTÉRÊT (*Econ. Polit.*) »」⁽²³⁾ではないかとの推測が成り立つのである。

金銭は、鉱山のない国々では3つの源から流れ出る。農業、産業、商業である。

農業はこれらの源の中で第1のものだ。農業は産業を養う。この2つはいずれも商業を生み、商業はこの2つと結びついて金銭をもたらし、流通させる。

しかし金銭はその利益が土地の産物、そして産業や商業による利益と釣り合わない場合は、農業、産業、商業を害する可能性がある⁽²⁴⁾。

このように項目「利子・利息（経済学）」の著者は、産業や商業のみならず、農業も——より正確には農業がもっとも——金銭の流通と密接な関係を持ち、不適切な金利は農業を害するものと主張している。この点において、金銭の流通に批判的な態度を示し、自給自足型の農耕生活を推奨するルソー⁽²⁵⁾とは対照をなしていると言える。

ところで、先の『四季』第4歌「冬」に関する注記は、本来肥沃な土地を耕すのを怠り、貧困状態に陥っている農民たちに対し、給料を支払い、労働意欲をかき立てることの利点について語った詩句に添えられたものである⁽²⁶⁾。詩人によれば、農民たちが勤勉に働くようになって土地が豊かさを取り戻した結果、小麦の収穫から得られる利益によってゆとりのある生活を送ることが可能になり、さらには「虐げられていると感じることなく税金を支払い／皆が裕福で満足し、王は愛された」というのだが⁽²⁷⁾、なかでも注目すべきは、労働を促すことで荒廃した土地に「産業と裕福さを呼び戻し」⁽²⁸⁾たいという主張であろう。つまり、『四季』の作者によれば、豊かさ

(22) Saint-Lambert, « INTÉRÊT (*Morale*) », dans *l'Encyclopédie*, t. VIII, 1765, pp. 818a-819a. この項目については以下の拙論ですでに検討している。井上櫻子「サン＝ランベールの道德思想—『百科全書』項目「利益« Intérêt » (*Morale*) の典拠研究—」『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』（慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会）第65号、2017年10月、pp. 55-66。

(23) « INTÉRÊT (*Econ.pol.*) », dans *l'Encyclopédie* t. VIII, pp. 825a-827a. 『四季』の記述を踏まえながら本項目の執筆者をサン＝ランベールとして同定する可能性については、以下の拙論で示唆している。井上櫻子「『百科全書』の無記名項目の執筆者同定—項目「利子、利息 Intérêt (*Économie politique*)」の場合—」『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』（慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会）第63号、2016年10月、pp. 19-30。

(24) « INTÉRÊT (*Econ.pol.*) », dans *l'Encyclopédie* t. VIII, p. 825b.

(25) 『新エロイズ』第4部以降に描かれるクラランの共同体はその好例である。特に、第4部書簡10、第5部書簡2を参照のこと。

(26) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Hiver », pp. 267-268.

(27) *Ibid.*, p. 268.

(28) *Ibid.*, p. 267. 下線は筆者による。

の追求という点において、農業と産業は互いに他を排除しないものとされているのである。このような主張は金銭の流通という観点から、農業と産業、商業を結びつけようとする『百科全書』の項目「利子・利息」の記述と整合している。さらに本項目を読み進めると、執筆者はアンリ4世の側近であったシュリー公、そしてルイ14世の治世を支えた財務総監コルベールがそれぞれ利子・利息を引き下げたことに言及しつつ、そこに積極的な意義を付与しようとしていることがわかる。

シュリーが大臣の職にあった時、農業がどれほど栄えたか、コルベールが大臣の職にあった時、わが国のマニファクチュアがどれほどの水準にまで達したかというのは周知の通りである。商業は彼のもとで新たな輝きを帯びた。戦争のせいでこの大臣が新たな税を設けることを余儀なくされなければ、あるいはただ税を設ける方法とその種類をもう少し管理できていたなら、農業も同じような運命をたどっていたであろう⁽²⁹⁾。

戦争資金の調達を目的とした過重な課税という障害さえなければ、コルベールの在職中に産業、商業だけでなく農業も発展しただろうという主張は、先に示した『四季』「冬」の詩句「虐げられていると感じることなく税金を支払い／皆が裕福で満足し、王は愛された」と共鳴し合う。さらにまた、商業と農業の発展は本来的には密接な関係にあるにもかかわらず、双方の発展を両立させるのを困難にしているのは戦争であるという発想は、『百科全書』を擁護する議論が展開された『四季』「冬」の注記とも関連付けられると考えられる。

商業の精神は次第に征服の精神に取って代わった。

哲学は商業そのものについて解明し、国内産業と優れた農業なくして堅固な商業などまったくないと示した⁽³⁰⁾。

『四季』「冬」に展開される議論との比較対照によって、サン＝ランベールが自ら執筆した項目と主張している「金銭の利子・利息《INTÉRÊT D'ARGENT》」とは『百科全書』第8巻に収められた「利子・利息（経済学）」を指すものである可能性が高いことが明らかになってきた。ところで、項目「金銭の利子・利息《INTÉRÊT D'ARGENT》」への言及がある『四季』「冬」の注記で、サン＝ランベールは「小麦の自由な取引」⁽³¹⁾が農業の活性化につながったとも述べていた⁽³²⁾。農業、あるいは田園生活と商業の関係について詩人がどのように考えているのかより

(29) « INTÉRÊT (*Econ.pol.*) », dans l'*Encyclopédie* t. VIII, p. 826a.

(30) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur « l'Hiver » », p. 286.

(31) *Ibid.*, p. 294.

明確にするため、サン＝ランベールが『百科全書』に寄稿したいいくつかの項目に以下目を向けてみたい。

Ⅱ. 『百科全書』項目「奢侈」

ここでまず参照すべきは『百科全書』第9巻に収められた項目「奢侈」⁽³²⁾であろう。本項目冒頭において、サン＝ランベールはまず奢侈を擁護する立場と批判する立場の双方が持ち出す論点を列挙しつつ、その一つ一つに回答を示してみせる⁽³⁴⁾。その中には、「奢侈が心地よい技芸のために有用な技芸を犠牲にし、人々を都会へ集めて農村を荒廃させる」⁽³⁵⁾という主張に対する以下のような反論が認められる。

ロンバルディアやフランドルは奢侈と見事な都市で満たされている。しかしながら、耕作人は裕福で、田野は耕され、住民があふれている。スペインには奢侈はほとんどないが、農業はなおざりにされている。そこでは有用な技芸がいまだほとんど知られていない⁽³⁶⁾。

サン＝ランベールによれば、奢侈と農村の繁栄は相対立するものではない。『四季』「冬」において、怠惰な農民たちを労働へとかき立て、土地をよみがえらせるきっかけとなっているのは、給与と豊かな生活への欲求であったが⁽³⁷⁾、言い換えればそれは「奢侈」への欲求である。このような発想は、18世紀前半に活躍した経済学者ジャン＝フランソワ・ムロン（Jean-François Melon, 1675-1738）の代表作『商業についての政治的試論』に認められる「奢侈はいわば怠惰と無為を減ぼすものだ」⁽³⁸⁾という記述を踏まえたものと考えられる。そしてこの怠惰への批判と労

(32) S. ムナンの以下の論考にも、サン＝ランベールが国際交易を推進するまでではないにしても、少なくとも農村地帯における小麦の取引を推奨しているとの指摘がある。Sylvain Menant, « L'économie sentimentale de Saint-Lambert », dans *Revue d'histoire littéraire de la France*, 117^e année, n° 3, septembre 2017, p. 518.

(33) Saint-Lambert, « LUXE », dans *l'Encyclopédie*, t. IX, pp. 763b-771a.

18世紀における奢侈の問題については、以下の著作および論考を参照した。André Morize, *Apologie du luxe au XVIII^e siècle et le « Mondain » de Voltaire. Étude critique sur le « Mondain » et ses sources*, H. Didier, 1909 (reproduction publiée chez Slatkine Reprints, 1970), Georges Gusdorf, *Les Sciences humaines et la pensée occidentale 4. Les Principes de la pensée au siècle des Lumières*, Payot, 1974, Pierre Rétat, « Luxe », dans *Dix-huitième Siècle*, n° 26, 1994, pp. 79-88.

(34) *Ibid.*, pp. 763b-764a.

(35) Saint-Lambert, « LUXE », dans *l'Encyclopédie*, t. IX, p. 764a.

(36) *Ibid.*

(37) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Hiver », p. 267.

(38) Jean-François Melon, *Essai politique sur le commerce. Nouvelle Édition, Cette édition est augmentée de sept chapitres, et les lacunes des éditions précédentes y sont remplies*, 1736, chap. IX, p. 109.

ムロンの経済思想については、以下を参照した。ムロン『商業についての政治的試論』米田昇平、後藤浩子訳、2015年、「解説」、pp. 375-425、米田昇平『経済学の起源——フランス 欲望の経済思想』京都大学学術出版会、2016年。

働の奨励が、『百科全書』の項目における奢侈擁護の軸となるのである。サン＝ランベールによれば、「富を有する人々における楽しみたいという欲求、必要なものしか持たない人々における裕福になりたいという欲求が、諸技芸とあらゆる産業を活性化させるはず」であり、「それがわれわれを『奢侈』へと導く本能と情念、そして『奢侈』そのものの第1の結果なのだ」⁽³⁹⁾とされる。そしてこの「『奢侈』へと導く情念」は、個人の生活の安定や幸福の追求のみに関わるものではなく、「国民や国家の富にとっても有利に働き得る」⁽⁴⁰⁾とした上で、奢侈そのものを断罪するのではなく、それが習俗に反しないようにするには、どのようにすべきか検討を進めていく。その結果、「『奢侈』へと導く情念は市民の間で必要とされる唯一のものではない。他の情念、つまり野心、栄光への愛、名誉と結びつく必要」があり、さらには「こうした情念はいずれも共同体の精神に従属すべきだ」との結論に至るのである⁽⁴¹⁾。このように、「野心、栄光への愛、名誉」といった情念の力に頼ることによって、個人の利益のみを優先して追求する傾向を抑止できるという主張には、やはりサン＝ランベールが『百科全書』に寄稿した項目「立法者」に見出される「立法者は社会的情念をかき立てることによって、市民を共同体の精神へと向かわせるのだ」という一節との連続性が認められる⁽⁴²⁾。さらにそうした「社会的情念」の中でも、「名誉の感情」⁽⁴³⁾を重視している点も項目「奢侈」との共通点として指摘できるだろう。また、サン＝ランベールが『百科全書』に寄稿した項目群には、「名誉」⁽⁴⁴⁾もふくまれており、ここでも名誉心が政体にとって必要なものであると強調されていることにも留意すべきである。情念の力を信じ、とりわけ名誉や栄光への愛の社会的有用性を重視する項目「奢侈」および「立法者」の議論にはエルヴェシウスの影響が認められる⁽⁴⁵⁾。いずれにせよ、こうした考察を踏まえ、サン＝ランベールは、奢侈が農地を荒廃させる直接の原因ではないと強調する。

「奢侈」がもっとも大々的に支配しており、農地が荒れ野となっている複数の王国に目を向けてみよう。しかしこのような災厄を都市における「奢侈」のせいにする以前に、このような王国の行政官たちの振る舞いはいかなるものであっただろう。私はこうした振る舞いから「奢侈」が原因とされる人口減少が生じ、「奢侈」そのものの濫用が生じるのだと考える⁽⁴⁶⁾。

(39) Saint-Lambert, « LUXE », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 765b. 下線は筆者による。

(40) *Ibid.*, p. 766a.

(41) *Ibid.*

(42) Saint-Lambert, « LÉGISLATEUR », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 359a.

(43) *Ibid.*

(44) Saint-Lambert, « HONNEUR », dans l'*Encyclopédie*, t. VIII, pp. 288a-290b.

(45) Claude-Adrien Helvétius, *De l'Esprit*, Durand, 1758, Troisième Discours, ch. 6, p. 304, Troisième Discours, ch. 16, p. 373. また、エルヴェシウスの人間論における名誉の問題については、以下の論考を参照した。森村敏己「エルヴェシウス：功利主義における名誉心——道徳哲学から統治改革論へ——」『経済学史学会年報』、第30巻、1992年、pp. 37-45。同『名誉と快楽：エルヴェシウスの功利主義』法政大学出版局、1993年。

サン＝ランベールによれば、例えばルソーがその著作の随所で浮き彫りにしているような奢侈をめぐる大都会と田園の対立は存在しない。「奢侈が支配する王国」において農地が荒廃する原因は、奢侈そのものよりも、むしろ行政官による適切な管理がなされていないことによるというのである。また、『百科全書』の項目「奢侈」において、一部の農民が生活の糧を求めて都市へと移り住むことになったのは、「田園の住民に税金と賦役の負担をかけ過ぎた」結果だとされていること、さらに一般に「奢侈」が原因とされる富の不均衡が「農村に対する圧政」によるものとされていることにも留意しよう⁽⁴⁷⁾。こうした議論は、『百科全書』の項目「立法者」および「金銭の利子・利息」への言及が含まれた『四季』の注記と対応する「冬」の詩句「虐げられていると感じることなく税金を支払い／皆が裕福で満足し、王は愛された」と呼応し合うものと言えるだろう⁽⁴⁸⁾。「奢侈」に否定的な価値をしか付与しようとししない人々の誤解を解こうと努めた後、サン＝ランベールは「可能な限りもっとも『贅沢な』ものを集めつつも、国家の真の富と習俗の保持にも配慮する賢明かつ頑強な政府の秩序を維持しうる人民の国家的精神とはいかにあるべきか」⁽⁴⁹⁾という問題に立ち向かう。

こうした富と習俗は大多数の人々の生活のゆとりの賜物、そして特に、階級や個人に対する差別なく、あらゆる活動を全体の幸福へと導き、たえず公衆に対してこのような徳高き意志を誇示しようとする政府の多大なる配慮の賜物である。

いたるところで、この大多数を構成するのは農村の住民と耕作者である、あるいはそうであるはずだ。彼らが裕福であるためには、勤勉でなくてはならない。勤勉であるためには、労働によって心地よい状態が得られるという希望がなくてはならない。そして彼らがそのような欲望を持たなくてはならない。気力をなくした人々は、自ら進んでごく必需品だけで満足するものだ⁽⁵⁰⁾。

労働によって豊かな生活が約束されるという希望を持った農民たちは、勤勉に働くようになる。その結果、農村にも彼らの生活に必要な家庭用品や、織物などを供給する工場が登場することになって、「富と人口が増加する」⁽⁵¹⁾。こうしたコルベール主義的発想は「フランス人を単なる商売上手な国民」⁽⁵²⁾にしてしまうものだという批判を踏まえつつ、サン＝ランベールは農村地帯に

(46) Saint-Lambert, « LUXE », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 766b.

(47) *Ibid.*

(48) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Hiver », p. 268, et « Notes de Saint-Lambert sur « l'Hiver » », p. 294.

(49) Saint-Lambert, « LUXE », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 768b.

(50) *Ibid.*

(51) *Ibid.*, pp. 768b-769a.

(52) *Ibid.*, p. 769a.

おける富の蓄積に社会的効用があると主張する。つまり、農民たちが富を得ることで期待されるのは、農民たちの中から「土地所有者」が数多く現れて貧富の差が解消され、さらには彼らが「勇気、精神力、強健な身体、祖国愛、そして行政官や、王、秩序、そして自らの幸福と安寧を負っているところの法に対する尊敬と愛着の念」⁽⁵³⁾といった国家にとって有益な感情や資質を獲得することだというのである。サン＝ランベールによれば、労働を通して獲得した富は、習俗を退廃させるどころか、むしろその獲得のプロセスにおいて個人の肉体と精神を鍛えるという点で、国家にも利をもたらすというのである。逆に言えば、富は労働を通して、まっとうな手段で手に入れられなければならない。その時はじめて、「奢侈」は正当化されるのである。『四季』『冬』において、怠惰な農民たちが労働意欲を取り戻し、荒廃した土地をよみがえらせて豊かな生活を手に入れるプロセスを描くとき、サン＝ランベールは『百科全書』において自ら展開した奢侈論を下敷きにしていると言えるだろう。

『百科全書』の項目「奢侈」結論部では、都市部や特定の階級に偏る傾向にある富を、社会の中で平等に分配する必要性が強調される。そのためにまずなすべきなのが、「農村の負担軽減」である⁽⁵⁴⁾。

今日のある国王は、その国の耕作者に都市部に居を構えることを禁止したが、これは私には大変な過ちであると思われる。彼らの身分を心地よいものにすることによってのみ、その身分を彼らにとって必要なものにできるのだ。そうすれば、さほど影響を与えることなく、農地に流入する職人の「贅沢」品にいくらか税を課すことができる。

首都の住民の数を減少させるには、少しずつ、そしてしかるべき立場にある人々を地方へと呼び寄せる義務に従事させるという手段によってでしかないのだ⁽⁵⁵⁾。

ここで批判の対象となっている「今日のある国王」がどの国の王を指すのか特定するには慎重な資料調査が求められるだろう。しかし、農村の貧困層が大都市へ移動しようと企て、流民が発生する事態への対策は、17世紀後半以降、ルイ14世およびルイ15世がさまざまに講じていたのは事実である⁽⁵⁶⁾。また、『百科全書』第8～17巻が刊行された1765年には、すでに定められていたパリの境界線を超えて住居を建てることを禁じた国王宣言⁽⁵⁷⁾が、さらにその前年の1764年には浮浪者を取り締まる国王宣言⁽⁵⁸⁾がそれぞれ出されていることを踏まえると、農村部から都市への

(53) *Ibid.*

(54) *Ibid.*, p. 771a.

(55) *Ibid.*

(56) ここでは以下の論考を参照した。大森弘喜「1724年王令と乞食・流民の処遇—マレショセとオピタル・ジェネラル—」『成城・経済研究』第240号、2023年3月、pp. 72-144。

人口流入への対応は1760年代半ばのフランスにおいて喫緊の課題であったことは容易に想像がつく。ところで、項目「奢侈」では、無為を糾弾し、労働を介して富を手にするを正当化するという方法で、都市経済と農村経済が対立関係にあるわけではなく、物資や金銭、人の流れを介して両者が密接な関係を持ちうると示される。こうした手段を用いることで、おそらくサン＝ランベールは、当時のフランスが抱えていたきわめて「現代的」な問題への解決策を提示しようとしたのではないか。

したがって、サン＝ランベールにとっては「奢侈」の擁護は田園生活の賛美と何ら矛盾するものではない。それどころか両者、換言すれば項目「奢侈」と『四季』は互いを補完し合うものである。『百科全書』の項目の中で、サン＝ランベールは、奢侈を手放すことによって、富が首都や特定の人物に集中する問題を解決しようとする試みの愚かしさを力説する。

商業がこれほど広がり、産業がこれほど世界的なものになり、無数の技芸が改善されつつある以上、今日、ヨーロッパをかつての素朴さに立ち戻らせることができると考えてはならない。そんなことをすると、ヨーロッパを脆弱な状態、野蛮状態へと立ち戻らせることになるだろう⁽⁵⁹⁾。

このような主張は、『百科全書』の弁護が展開された『四季』「冬」の注記に見られる「人間の精神は、コンスタンティヌス帝から15世に至るまでそうであったように、後退することはできない。野蛮状態に立ち戻るには地球全体に大変革が起こる必要があるだろう」という一節を想起させるし、商業や産業の発展と農村の発展が不可分であるとする発想は、『百科全書』の項目「利子・利息（経済学）」の議論と結び付けられるものとも言える⁽⁶⁰⁾。さらにまた、項目「奢侈」では、農村の負担軽減の重要性が強調されていたが、項目「利子・利息」では、利息の軽減が主張されていたこともここで思い起こすべきだろう。

(57) Déclaration du roi, qui fixe les limites de la ville et faubourgs de Paris, donné à Marly le 16 mai 1765. この国王宣言によると、同様の宣言は1724年7月18日、1726年1月29日、1728年3月23日および9月14日、そして1740年7月にも発せられているとあり、パリへの無秩序な人口流入への対応が大きな課題の一つとなっていたことがわかる。

(58) Déclaration du roi, concernant les vagabonds et gens sans aveu, donné à Compiègne le 3 août 1764.

(59) Saint-Lambert, « LUXE », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 770b.

(60) 項目「立法者」結論部の以下の一節も併せて参照すべきだろう。「商業の精神、そしてそれぞれの国の真の利益について今日人類が有する知識からは、『立法者』はかつてそうであったほど防衛や征服に心をとらわれるべきではない。彼らは土地を耕作し、諸技芸をはぐくみ、それらの産物を消費し、収益を助長すべきである。」 Saint-Lambert, « LÉGISLATEUR », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 363a.

Ⅲ.『百科全書』項目「穀物」とサン＝ランベールの農村経済に対する思索

ところで、サン＝ランベールが『百科全書』に寄稿した項目「金銭の利子・利息」——おそらくは「利子・利息（経済学）」を指すものであろう——への言及がある『四季』「冬」の注記では、「小麦の自由な取引」が農業を再活性化したと述べられていた。農村経済と奢侈に対するサン＝ランベールの考え方をより明確にするため、ここで『百科全書』の項目「穀物 « GRAINS (*Economie polit.*) »」⁽⁶¹⁾を紐解いてみたい。重農主義の経済学者フランソワ・ケネーによって執筆された本項目では、まず「フランスの主たる商品は、『穀物』、ワイン、蒸留酒、塩、麻、亜麻、羊毛、そして家畜が生産するその他の産物である」にもかかわらず、「贅沢品の工場が国民を魅了した」ことによって、農産物の重要性が顧みられなくなりつつあると指摘される⁽⁶²⁾。特に懸念が示されるのは、「小麦価格の引き下げ」にともなう影響である。

人間と富が都市に集中した。農業は、わが国の商業・取引の中でもっとも豊かで高貴な分野であり、王国の収入源なのだが、わが国の富の根源的基盤だとはみなされなかったのだ。農業に関心を持つのは小作人と農民だけである。彼らの仕事は国民の生活維持に限られてしまった。国民は食料の購入によって耕作にかかる費用を支払う。人々は、王国に金や銀をもたらすのは商業あるいは産業に基づいた取引だと考えたのである⁽⁶³⁾。

このように、ケネーは「金や銀」、すなわち富をもたらす商業や産業を重視する一方で、農業を「生活維持」にのみ必要なものとして過小評価する傾向を非難する。上掲の引用文で興味深いのは、「農業は、わが国の商業・取引の中でもっとも豊かで高貴な分野であり、王国の収入源なのだ」という一節であろう。農業を商業の一部とみなすあり方は、『百科全書』の項目および『四季』から確認されるサン＝ランベールの農村経済に対する考え方と似通っているが、さらに注目すべきは、項目「穀物」に展開される主たる主張の一つに「小麦の自由な取引」がふくまれているということである⁽⁶⁴⁾。なぜならケネーは、それが農業および農村地帯の再建に資すると考えているからである。

これらの規則 [= 課税についての規則] が恒常的かつ正確に遵守され、穀物の取引が自由になり、小作人の子どもたちは民兵制から免除され、賦役が廃止されたとしたら、タイユ税

(61) François Quesnay, « GRAINS (*Economie polit.*) », dans l'*Encyclopédie*, t. VII, 1757, pp. 812a-831b.

(62) *Ibid.*, p. 812a.

(63) *Ibid.*

(64) *Ibid.*, p. 812b, p. 816a, p. 825b, p. 827a.

の課税対象でありながら、職業を持たずに都市へ逃げ込んだ大多数の地主は農村へ戻って自分たちの財産を安らかに有効活用し、農業から得られる利益にあずかることだろう。自信をもって都市を去るような裕福な住民によってこそ、農村は土地の耕作を復活させることのできる農民で再び人口が増えることだろう⁽⁶⁵⁾。

一旦都市へ逃げ込んだ人々を再び農村へ連れ戻すには、課税についての規則が遵守され、農民が民兵制から免除され、賦役が廃止されることが必要だという記述は、社会における富の平等な分配のために「農村の負担軽減」を求める『百科全書』の項目「奢侈」結論部の議論と重なり合う。そしてまた、農村地帯の活性化が都市部への人口流入問題を解決するという主張もケネーとサン＝ランベールに共通するものである。サン＝ランベールが農村経済についての思索を深めるにあたり、ケネーの経済思想を参照していた可能性はきわめて高いと考えられる。また、『百科全書』の項目「利子・利息（経済学）」には、金利を引き下げたことがシュリーのもっとも優れた政策の1つと記されているが、よく知られているように1758年にまとめられたケネーの『経済表』にはシュリーの『王国の経済』からの抜粋が添えられていることもここで付記しておくべきであろう⁽⁶⁶⁾。

ムロンの『商業についての政治的試論』およびヴォルテールの韻文詩「俗世人 *Le Mondain*」(1736年)の発表をきっかけとしてフランスで起こった奢侈論争には、18世紀の多くの文人たちがそれぞれの立場からそれぞれの方法で参加したことは周知の事実である⁽⁶⁷⁾。そのプロセスの中で、キリスト教的道德論によれば断罪されるべき悪徳の一つであった奢侈は、次第に容認されていった。田園生活の賛美を目的とした詩集『四季』と『百科全書』の項目とを比較しながら読み進めると、サン＝ランベールは重農主義的観点から「奢侈」を擁護していることがわかる。この点においてサン＝ランベールの議論は、商業の発展との関わりから奢侈を擁護するモンテスキューやヴォルテールとは一線を画すとともに、フランスにおける経済学が発展が新たな局面に入りつつあることを示している。小麦取引を自由化する必要性はムロンによっても指摘されていたが⁽⁶⁸⁾、サン＝ランベールが匿名で「奢侈についての試論」を発表した1764年は、「(フランス)王国における小麦の出入りの自由化についての王令」⁽⁶⁹⁾が出された年である。さらにまた、1766

(65) *Ibid.*, pp. 824a-824b.

(66) « INTÉRÊT (*Econ.pol.*) », dans *l'Encyclopédie* t. VIII, p. 826b ; Quesnay, *Tableau économique*, suivi d'*Extrait des économies royales*, 1759.

(67) 森村敏己「知られざる文人たちの奢侈論争——1782年ブザンソン・アカデミー懸賞論文」『一橋社会科学』第7巻、2015年、pp. 53-74。

(68) Melon, *Essai politique sur le commerce. Nouvelle Édition*, chap. 2, pp. 13-29.

(69) *Édit du roi, concernant la liberté de la Sortie et de l'Entrée des Grains dans le Royaume*, donné à Compiègne au mois de juillet 1764.

年には金利を引き下げる王令が發布されてもいる⁽⁷⁰⁾。1769年に刊行された『四季』「冬」の注記で「小麦の自由な取引と利息の軽減が王国のすみずみに至るまで農業を活性化した」⁽⁷¹⁾と過去形で語られているのは、王令の効果に言及しつつ、自説の正当性を訴えようとしたためであろう。

* * *

『百科全書』の項目「立法者」および「金銭の利子・利息」への言及がふくまれ、さらに小麦の取引自由化を訴えた『四季』「冬」の注記は、1769年に刊行された初版にのみ確認され、それ以降の版では削除されてしまうものだ。1764年の王令が発せられた数年後には不作の影響もあって小麦の価格が高騰し、自由取引の是非をめぐる議論が広がったからだろうか。実際、『四季』初版が刊行された翌年の1770年には、重農主義批判を展開したナポリ出身の経済学者フェルディナンド・ガリアーニの『小麦の取引についての対話 *Dialogue sur le commerce des blés*』が刊行されることとなる。しかし、改訂版では消えてしまう「冬」の注記に目を向けることによって、『百科全書』にサン＝ランベールが寄稿したいくつかの項目の関連付けと無記名項目の同定が可能になるだけでなく、18世紀後半のフランスにおける奢侈論争のゆくえをたどりつつ、経済学の発展と農業の社会的位置付けの変化をもとらえ直すことができると考えられる。

付記：本研究は JSPS 科研費24K03798の助成を受けたものです。

(70) *Édit du roi, portant qu'à l'avenir le denier de l'intérêt de l'argent sera fixé au denier Vingt-cinq*, donné à Versailles au mois de juin 1766.

(71) Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur < l'Hiver > », p. 294. 既出の一節であるが、時制を明確にするため訳し方を変えている。また下線は論者による。